

# 文化に焦点化した「グローバル社会学習」の授業開発

— 附属小学校3校の連携を生かして —

新谷 和幸 中丸 敏至 伊藤 公一 服部 太  
沖西 啓子 木村 博一 永田 忠道

## 1. はじめに

本研究は、グローバル化する社会の様相を、人や情報、物資の広がりだけでなく、経済や文化、環境といった観点から、既存社会に与える影響や要因を踏まえ分析し、グローバル化する社会を構造的にとらえる授業の開発・実践を目的としている。本研究では、この学習を「グローバル社会学習」と定義した。また、他国との関係を考えながら既存社会をとらえたり、既存社会の状況を考えながら世界経済や地球環境をとらえたりする見方・考え方（社会をとらえるグローバルな見方・考え方）をグローバル社会学習で育む資質とした<sup>1)</sup>。

今年度は、グローバル化がもたらす文化面での影響に着目し、それが社会問題化する背景を探る一方、多文化共生が進む中、既存社会で形成された固有の文化のあり方について分析・検討することを通して、「グローバル社会学習」の授業開発を行っていく。

## 2. 文化のグローバル化の社会構造と問題点

### (1) グローバル社会による文化の画一化と多様化

近年の文化に関するグローバル化は、政治・経済的な力学を背景に、20世紀後半から強まってきたものである。欧米を中心にポップカルチャーが興り、アメリカによる新自由主義経済の進展とともに文化産業が発展し、ITと結合することでグローバルマーケットを形成するまでに成長した。つまり文化のグローバル化は、IT革命と経済のグローバル化が相まって、文化的商品の流れを助長したことに起因する。それ故、文化のグローバル化は、経済同様、アメリカ文化のグローバル化による「文化の画一化」としてとらえられることが多い。このアメリカ主導の画一化は、文化の違いそのものを消滅させる可能性があるとして、問題視する見方がある<sup>2)</sup>。

他方、アメリカ文化による画一化に対する脅威は、文化ごとの境界線を顕在化させ、国や地域の独自文化に対する人々の意識を高め、既存文化の魅力の再発見につながっている。この動きは、多文化共生の考え方を背景に、文化のグローバル化を「文化の画一化」としてでなく、「文化の多様化」という観点でとらえる必要性を示した。

この「文化の画一化」と「文化の多様化」というグローバル化の方向性は、既存文化がもつ普遍性と特殊性という2つの異なる性質が関係する。これらの性質は、既存社会の現代文化と伝統文化に色濃く表れている。そこで、既存社会の文化として日本文化に着目し、文化のもつ普遍性と特殊性について検討してみよう。

### (2) 日本文化に内在する普遍性と特殊性

既存文化は、一般的に現代文化と伝統文化の2種類がある。その内、普遍性を示す文化には、日本から海外に向けて発信され、世界の様々な地域や人々に認知され生活の中に受け入れられている日本の現代文化がある。例えば、ジブリのアニメやドラえもん・キャプテン翼などのマンガ、プレイステーションなどのテレビゲームといったサブカルチャーが、それである。これらは表面的に日本固有の特色や歴史を感じさせない。この個性のなさが海外に一定の共感や理解をもって受け入れられている。

また、特殊性を示す文化としては、過去の歴史との継続を強調する日本の伝統文化がある。例えば、厳島神社や金閣などの歴史的建造物、和食や和紙などの食文化や伝統工芸などが、それである。これらは、日本固有の文化として価値が認められ、世界遺産とされているものもある<sup>3)</sup>。

このように、グローバル社会で既存文化を成立・持続させるには、既存文化がもつ普遍的・特殊的価値を

---

Kazuyuki Niiya, Satoshi Nakamaru, Kouichi Ito, Futoshi Hattori, Keiko Okinishi, Hirokazu Kimura, and Tadamichi Nagata: Developing a class on “global social learning” with a focus on culture: Employing cooperation of the three affiliated elementary schools

世界が認めなければならない。そのためには、自国民が自国文化の価値に気づき、それを魅力的な文化として世界に発信し文化交流していくことが重要である。

例えば、経済のグローバル化において自国製品を世界に売り込む場合、自国の特徴を意識してそれを強化する方法が注目されている。ピーター・ヴァン・ハムは、「ブランド国家論」において、外国から直接投資を誘致し人材を募り、政治的な影響力を担うには、強いブランド力を持つことが必要だとし、その形成に大きな役割を果たすものとして「文化」を挙げている<sup>4)</sup>。

また国際政治では、グローバル化によりNGO等政府外の団体が存在感を高め、政治的影響力を有する主体が多様化している。このような状況を踏まえジョセフ・S・ナイは、軍事力や経済力による強制ではなく、文化などの魅力によって自らが望むものを他国も望むようにさせる「ソフトパワー」の重要性を指摘している<sup>5)</sup>。特に近年の日本の観光振興は、日本の魅力を世界に発信する政策として高く評価されている。外国人観光客が日本文化を直接肌で感じ理解を深めることで、日本に対する親近感、共感を高める効果が期待されると同時に、観光客を受け入れることで日本人も自国文化や社会の在り方を見直す機会ともなっている。

このように、既存文化の魅力発信や文化交流には、いずれも、グローバル社会での政治的・経済的なアプローチが大きく関与していると言えよう(図1)。

しかし、現代文化や伝統文化にしろ、既存文化を生み出す源は、既存社会の環境や歴史によって生まれ、人々の感性や習慣に根差した精神性である。

では、このような既存文化の基盤となる精神性は、グローバル社会においてどのように伝播されるのだろうか。文化の伝播を見てみよう。

の3つに大別できる。これを文化の移動や交流の要素としてとらえた場合、「モノ」は食材や建築物などの有形の「物質的文化」、 「コト」は、社会生活を営む上での習慣や食事法といった無形の「制度的文化」、 「ヒト」は思想、道徳、宗教、学問、もてなしの心といった無形の「精神的文化」に分類することができる。

文化の伝播に関しては、物質的文化が伝播する時、非物質的文化は同時に伝播するのではなく後追いするとした、オグバーンの「文化の遅滞」理論がある。一般的に文化は、物質的文化→制度的文化→精神的文化の順で伝播する性向がある。中でも精神的文化は最も遅く難解であり、その伝播の成立はヒトの精神的所産が変容されることを意味する<sup>6)</sup>。

つまり、グローバル社会では、物質的文化は物流の発達等により伝播しやすいが、精神的文化は可視化されず、既存社会の環境や歴史によって育まれているため、限りなく伝わりにくいと言える。海外のすしが、自然を尊ぶ精神性に支えられた日本の伝統的な寿司とは異なるものであったり、プロのバイオリニストやバレリーナがその道の真髄を究めるため、海外に留学したりするのは、好例であろう。

では、文化の画一化による問題とは一体何か。それは、急速かつ大量の物質的文化の伝播による既存産業の衰退だけではない。物質的文化に伴う制度的文化の伝播がもたらす、既存の社会習慣の衰退や人々の生活スタイルの変容といった既存社会における制度的文化の衰退にある。

例えば、アメリカの食文化であるハンバーガーという物質的文化の伝播は、ファーストフードという概念と共に、いつでも手軽に素早く食べる食習慣を戦後日本にもたらし、人々の食習慣やマナーへの意識を変容させた。近年日本の和食が世界遺産化された背景には、このような日本の食習慣の衰退がある。

日本の歴史を振り返ると、これまで海外から様々な文化が伝播されてきている。特に明治維新の文明開化では、国策として西洋の社会制度や習慣を取り入れてきた。しかし実際には、それまでの社会的慣習が消滅することはなかった。伝播された文化は、洋食のように日本の風土に適したものに再創され、今日も既存社会の文化としてとらえられているものが多い。

それに対して戦後以降のグローバル化では、情報手段や物流の急速な発達によって、一度に大量の物質的文化を多くの人々に伝播できるようになった。それ故、これまでのように日本の風土や気質に合ったものへ再創する時間的ゆとりがなかったと考えられる。物質的文化に内在する外国の風土や歴史(場合によっては政治・経済)をとらえたり、伝播した文化を日本の風土

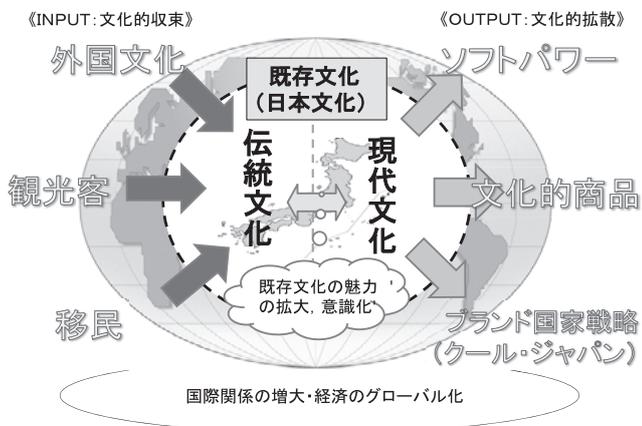


図1 文化のグローバル化と既存文化の様相

### (3) 文化のグローバル化による社会問題

文化を広義的に解釈すると、「モノ・コト・ヒト」

や気質と対峙させたりすることなく、既存社会の中に直接取り込んでしまった。このことが、近年の文化のグローバルにおける文化の画一化がもたらす問題の大きな要因と考えられる。

### 3. 文化面でのグローバル社会学習の授業類型

本稿では、これまでの検討を踏まえ、文化のグローバル化における既存文化の影響や様相、社会問題化する構造をとらえ、グローバル社会における既存文化の今後のあり方を考える活動を通して、児童にグローバルな見方・考え方を育むことができる授業を構成していく。今回、既存社会を軸として文化のグローバル化をとらえる上で、児童が学習材を通して具体的に学べられるよう、文化の伝播の方向性や既存文化の種類を焦点化し、「INPUT-伝統文化型」、「INPUT-現代文化型」、「OUTPUT-伝統文化型」、「OUTPUT-現代文化型」の4つに授業を類型化し授業開発を行った(図2)。

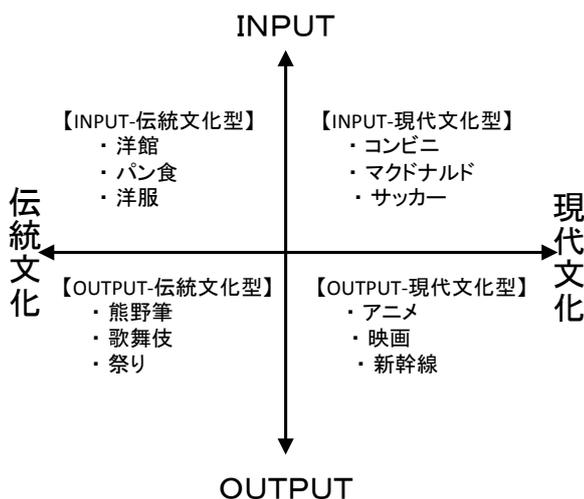


図2 文化面でのグローバル社会学習の類型

### 4. 文化面でのグローバル社会学習の授業開発

先のグローバル社会学習の類型に沿って、本章では「INPUT-伝統文化型」を除く3類型4授業を以下に示す。ちなみに、「INPUT-伝統文化型」は、開発授業と類型との適合性について議論が分かれたため、本稿の掲載を見送った。

#### (1) 「INPUT-現代文化型」授業の開発

①単元名「グローバル社会におけるサッカー文化」  
(第4学年)

#### ②単元目標

○サッカーは、身体的・精神的快楽や歓喜、対等性、ナショナリズムといった精神性により、世界各国に

受け入れられたことを理解できるようにする。

○日本に入ってきたサッカー文化の今後の変容を、各国のリーグ優勝争いチームの現状から、自分なりに考えることができるようにする。

#### ③単元計画(全7時間)

第一次 なぜ、世界や日本でサッカーは広まったのだろうか(5)

第二次 日本におけるサッカーの変容(2)

#### ④授業設計の視点

サッカーはどのような精神で、日本に伝播したのか。サッカーに関する精神として、①身体的・精神的快楽や歓喜といった精神性、②対等性、③ナショナリズムの3つを挙げる。

まず、①「身体的・精神的快楽や歓喜といった精神性」は、どんなスポーツにも含まれている。実際、私たちがスポーツでうまくプレーできれば、身体的・精神的快楽や歓喜を得られる。

他方、スポーツを観戦する立場ではどうか。ゴールが決まった瞬間、華麗なフェイント、見事なセービングを見た時、私たちは快楽や歓喜を感じることができる。

スポーツは、するにも見るにも身体的・精神的快楽を得られる。言葉で表現しにくい快楽や歓喜は、世界でサッカーが受容された要因の1つである<sup>7)</sup>。

次に、競技を行う上での②「対等性」である。サッカーは、イギリスの植民地支配の過程で、各国に伝えられた。最初は、イギリス人同士による競技であったが、次第に植民地の人々にサッカーを教えることで、イギリス人チームに混じって競技させたり、植民地チームを作らせて対戦させたりした<sup>8)</sup>。

日本でも、1873年に東京・築地にあった海軍兵学寮において、イギリス人が教育の一環としてサッカーが行われた。これが、日本におけるサッカーの始まりとなる。その後サッカーは、東京高等師範学校から全国へと普及していった<sup>9)</sup>。

このように、サッカーは政治的支配関係があったとしても、競技の中では対等性が保たれている。このような対等性も、サッカーが受け入れられた要因の1つとなっている。

最後に、国の代表としてサッカー競技を行う上での③「ナショナリズム」との関係である。

サッカーは、これまで幾度となく、ナショナリズムと結びついてきた。例えばドイツのヒトラーは、実力で勝るイギリスとの試合で、ドイツ選手の行儀よさ、礼儀正しさ、敗北を受け止める姿を通して、ドイツ国民に対する国威発揚に成功した。同じことはイタリアのムッソリーニも行っている。また、スペインのフラ

ンコは、国の中央集権的な支配体制を保つために利用した。多民族国家であるスペインは、統一後も民族による地域対立が根強く残っていた。そのために、フランコは首都にあるレアル・マドリードを意図的に強くし、サッカーを通してスペイン国民に対する暗黙的な中央集権を図っている<sup>10)</sup>。

このように、サッカーに内在する三つの精神性はサッカー文化の伝播に大きく関わり、近年のグローバル化を通して、深化・拡大している。

他方、先の②「対等性」に関しては、サッカー競技を行う観点以外では対等性がないとも言われている。それは、欧州や南米の主要リーグに見られる、「優勝争いをするチームが決まっている状態」のことを指す。例えば、ポルトガルプロサッカーリーグでは、最上位リーグ（プリメイラ・リーグ）を16チームによって順位が競われるが、その内80年間で5チームしか優

勝できていない。その中でもSLベンフィカ、FCポルト、スポルティング・リスボンの三強で、大半の優勝が決まっている。リーグ戦という観点で見ると、サッカーの盛んな欧州や南米の実態は、対等性よりも、特定のチームの優位性が目立つ。戦後発足した日本のJリーグも特定チームによって優勝争いを行う状態になるのだろうか。その状態を日本人はどうとらえるか。サッカー文化の対等性について、日本人の精神性と対比して考えられるような授業構成も可能と考えた。

### ⑤本時の目標

日本でサッカーが受け入れられた理由について、資料を基に広島県と東京都に共通するサッカー文化の対等性を読み取るとともに、日本のメキシコオリンピックでの活躍やJリーグの創設の事例からナショナリズムとの関連性についても、理解することができる。

### ⑥本時の展開（第一次第5時）

学習活動と内容	教師の働きかけ
1. 日本にサッカーが伝播した年を想起する。 ・1863年にイギリスで誕生。 ・欧州や南米には1863年以降に伝播。 ・サッカー文化の対等性が世界伝播の一因。 2. 資料（東京、広島）から、日本にサッカーが伝わった時期を読み取る。  3. 世界や日本への普及の共通点を探る。 <対等性>・日本への英国からの伝播。 ・現地人に理解しやすいスポーツ。 <ナショナリズム> ・オリンピックでの日本の活躍 ・Jリーグやワールドカップの存在。 4. サッカーの日本や世界の普及要因を考える。	1. 前時の学習内容を基に、日本のサッカー伝播の年を想起できるように、以下の点に留意する。 ・1863年にサッカーが英国で誕生したこと。 ・英国の植民地支配を通して伝播したこと。 2. サッカーが日本に受け入れられた理由に迫ることができるように、以下の手立てを行う。 ・世界各国への伝播と同様かという発問。 ・日本サッカー史、国際交流試合の資料を提示。 3. サッカーの普及要因の共通性や対等性やナショナリズムの観点をとられるよう、以下を推せる。 ・植民地や居留地の英国人のレクリエーション。 ・英国人によるサッカー指導、英国人との試合。 ・日本教育の一環としてのサッカーの存在。 ・オリンピックや地域密着型のクラブチーム。 4. サッカーが日本や世界に普及した要因を考えられるよう、サッカー文化の精神性に着目させる。

### (2)「OUTPUT－伝統文化型」授業の開発

#### ①単元名「グローバル社会から見る日本の祭り」 (第5学年)

#### ②単元目標

- 日本にある多くの祭りの成り立ちや受け継がれている様子に関心をもつことができるようにする。
- 資料を基に祭りの歴史的背景やこれまで続けてきた経緯を読み取ることができるようにする。
- 2つの祭りを比較を通して、海外に伝播する祭りと伝播しない祭りの違いや、祭りにこめられた願いを考えられるようにする。
- 日本の精神的文化の強い祭りは海外に伝播しないが精神的文化の弱い祭りは海外にも伝播していくこと、どちらの祭りにも人々の祭りにこめられた願い

があることを理解できるようにする。

#### ③単元計画（全9時間）

- 第一次 広島の祭りをふり返り、単元を貫く学習問題「日本には、他にどのような祭りがあるのだろうか。」を設定する（2）。
- 第二次 YOSAKOIソーラン祭を通して、祭りにこめられた人々の願いを考える（3）。
- 第三次 白間津のおおまちを通して、祭りに込められた人々の願いを考える（3）。
- 第四次 日本の祭りの共通点や違いを整理する中で、日本独特の文化を理解したり、グローバル社会の中での日本文化のあり方を考えたりする（1）。

#### ④授業設定の視点

柳田は、祭りを「祭」と「祭礼」に区分した。祭を

主催する人と、それを司る人だけによって行われる宗教的儀礼を「祭」とし、公共に開かれた直接関係ない見物人や商いをする人々が加わった神事を「祭礼」と称した<sup>11)</sup>。元々お祭りとは、そこに住む一族が行う、年に一度のその土地の最も重要な一大イベントであった。このような祭りは「見物」の発生が一つの変わり目になる。見物の発生は「見られる祭」を美しくしようと心がけながらも、神様への思いや願いを大切にされた。そのため、新旧儀式の組み合わせによって、大小様々な祭りが生じるとともに、色々な行事が含まれることになった。

また柳田は、日本以外の祭りでは見られなくなるものの、今日の祭りの中に必ず備わっている要件として、①ミテグラを立てること、②必ず食物をお進め申すこと、③木の存在、を挙げている。しかし、日本の祭りは、その変遷を重ねることで、物忌みが簡略化され、もっとも手軽な精進すらも、守らずともよいかのごとく考えられ始めていると指摘する。大藤も「今日の祭礼において、とくにないがしろにされているのは物忌みである。物忌みとは、神を祀るにふさわしいように精進潔斎することである。」と述べている<sup>12)</sup>。

山上は、祭りを、村の祭りと町・都市の祭りに大別した<sup>13)</sup>。

村の祭りでは、五穀豊穡を願い、神を迎え、厳粛な祭儀を行う。その神事は村人のみを対象者として行われ、多くはヨソ者である観光客は意識されない。人口過密になった近世の町・都市において、もっとも恐れられた外敵は天災や流行病であった。特に高温多湿な夏季に流行病などが多発し、その災厄というケガレを除去するために行われたのが祭りだった。

例えば「白間津のおおまち」は、千葉県南房総市に1000年も前から伝わる祭りである。村中の男女の性別・年齢により、祭礼の役割がそれぞれ決まっている。祭りの中心的存在に仲立ちがいる。12歳になった氏子の少年から選ばれるが、選定の基準は非常に厳しい。仲立ちに選ばれると二人には厳しい精進潔斎の勤めが課せられ、祭の50日前から「穢れを避ける」ために、家族と別火の生活を過ごし祭を迎える。これらの習俗は現在も固く守られている。

他方、現代では、市民参加のパレードや商店街の活性化を目的とした、神不在の祭が開催されている。今日祭の開催が都市の貴重な集客力になり、その経済効果が高く評価されている。

例えば、「YOSAKOIソーラン祭り」は、戦後高知でつくられた「よさこい祭り」を基にし、1992年に札幌で誕生した祭りである。このYOSAKOIソーラン祭りが全国的に知られるようになると、瞬くうちに全国

へ伝播していった。国内だけでなく、海外のブラジル日系社会にも伝えられ、「YOSAKOI SORAN」として独自の文化となりつつある。

ブラジルの日系社会では、日本からブラジルへの移民が開始されてから100年が経ち、日本語のできる世代が減少し、日本人同士の絆も弱まっていると言われる。そんな一世がYOSAKOIソーラン祭りの存在を知り、振付解説付きビデオテープを入手し、日本文化に関心がある三世以降の若者に見せた。

YOSAKOIソーラン祭りは、ブラジルで受容され非日系人の参加も奨励した。「YOSAKOI SORAN」は、ブラジルの文化に受け入れられただけでなく、多様な民族的、文化的背景をもった人々とのコミュニケーションを深めることにもつながっている。

「白間津のおおまち」と「YOSAKOIソーラン祭り」の2つの祭りに共通して言えることは、祭りは日本独特の文化であり、グローバル社会が進展しても受け継がれてほしいという人々の思いは同じということである。逆に2つの祭りの異なる点は、精神的文化の有無である。神＝村人の祖霊である日本独特の祭りはヨーロッパのキリスト教文化圏など他国にはない文化であり、海外には伝播しない。神が不在で精神的文化のあまりない祭りは、他地域や海外にも伝播していく。このような日本の祭りには大きく2つに分けられることに気づかせたい。

そこで、次のような単元構成で授業開発した。

まず、前時までに学習している宮島に伝わる管弦祭を思い出させ、祭りの特色を振り返る。その後「日本にある祭りには、人々のどのような願いがこめられているのだろうか。」という学習問題を提示する。

次に、日本独特の祭りの事例として「白間津のおおまち」、国内や海外に伝播していく祭りの事例として「YOSAKOIソーラン」を取り上げる。2つの祭りの歴史的背景、祭りにかかわる人々の思い、祭りにこめられた思いを探っていく。

最後に、二つの祭りを比較することで、日本の祭りの精神的文化に着目し、神が存在しない祭りは海外に伝播しやすいが、神が存在する祭りは他地域や海外には伝播しないことに気づかせる。また、どちらの祭りにも、これらの祭りを受け継いでほしいという人々の願いは変わらないことにも気づかせたい。

#### ⑤本時の目標

白間津のおおまちとYOSAKOIソーランを比較することで、祭りという文化もグローバル化の影響を受けているが人々の願いは変わらないことや、グローバル社会であっても日本独特の神を大切にする祭りは海外に伝播しないことを理解することができる。

## ⑥本時の展開（第四次第9時）

学習活動と内容	教師の働きかけ
1. 本時の学習問題をつかむ。 ・日本の祭りには、どのような願いがこめられているのだろうか。 2. 日本の祭という文化についてまとめる。 ・白間津のおおまちは、1000年もの長い年月、受け継がれている。 ・祭（村の祭り）は主催する人とそれを司る人だけによって行われる。 ・神＝祖霊であり、地域住民主体で他へは伝播しにくい。 ・日本独特の祭りでありながら少しずつ変化している。 ・YOSAKOIソーラン祭りは神が存在しないので、他地域や海外にも伝播し、受け入れやすい。 ・現代の祭りは経済効果も期待されたフェスティバル。 3. これからの日本の祭のあり方について考える。	1. これまで学習した2つの祭りについて振り返らせる。 2. 2つの祭りの共通点や相違点、特徴などを表にまとめることで思考の助けとする。 ・文化の伝播の様子がわかるような地図を提示する。 ・祭は日本独特の文化であり、グローバル化が進んでも大切に受け継がれてほしいという思いは共通していることに気づかせる。 ・多様な意見があることを気づかせるために、グループで話し合う活動を取り入れる。 3. 二つの祭りを比較することで、日本独特の無形の精神的文化である神の存在に気づかせる。

### (3)「OUTPUT－現代文化型」授業の開発 I

#### ①単元名「これからの日本アニメ文化産業」

(第5学年)

#### ②単元目標

- 我が国の日本文化に関する社会的事象に関心をもとうとする。
- 日本文化に関する社会的事象から学習の問題を見出して追究・解決し、社会的事象の意味を考え、適切に判断できるようにする。
- 日本文化に関する社会的事象について、統計等の基礎的資料を効果的に活用できるようにする。
- 様々な文化を海外に情報として伝えるには、各国の社会的背景や文化的背景が関係してくることを理解できるようにする。

#### ③単元計画（全5時間）

第一次 クールジャパン戦略による日本文化の発信（1）

第二次 日本アニメのグローバル化（4）

- ジブリアニメの海外進出の歴史
- 「千と千尋の神隠し」の概要
- 「ドラえもん」のアメリカ進出
- 日本アニメのグローバル化に向けて

#### ④授業設計の焦点

##### a. クールジャパンにおけるアニメーション

グローバル社会の構造について、現代の日本社会における日本独自の文化様式を国家戦略として世界に広める動きがある。これまで日本が海外に発信してきた多くの情報によって、海外における日本のイメージが形成され、同時に日本経済を牽引してきたともいえる。そうした中、我が国の生活、文化に根差した魅力やその付加価値を商品やサービスといった形で産業化し、旺盛な需要が期待されているものとして、クール

ジャパン政策が挙げられる。この政策で重要な事はいかに日本文化を知ってもらおうかである。

アン・アリスンは、「日本文化に接し、興味をもつ」上でアニメが日本文化のガイドブックとしての役割を果たすことを指摘する<sup>14)</sup>。アニメは日本文化を知ってもらう有効な方法と言える。

日本で有名なアニメとして、「ドラえもん」がある。日本だけでなく、東アジア・東南アジア諸国でも人気の作品だが、アメリカでは2014年まで放送されていなかった。現在アメリカでは、日本の吹き替え版ではなく、現地の文化・生活習慣に合わせて変更されたローカライズ（現地化）版である。アメリカの視聴者に馴染みやすい内容となるよう、改めている。

他方、2001年に発表された映画「千と千尋の神隠し」は、海外でも上映されたものの、「ドラえもん」のような大幅な内容変更はされなかった。それにもかかわらず、ベルリン国際映画祭で金熊賞を、米国のアカデミーアワードでは長編アニメーション映画賞を受賞するなど、高く評価されている。なぜこのような違いが起こるのだろうか。文化のグローバル化を考える上で有効な学習材となるのではないかと考えた。

##### b. グローバル化に対応した「千と千尋の神隠し」

「千と千尋の神隠し」が欧米で受け入れられる理由に、主人公「千尋」の姿が子どもたちへの「ロール・モデル」となっている点がある。

物語前半の千尋は、自分からは何もしようとせず、無気力・無関心で、生気が感じられない甘やかされた人物として描かれている。しかし、その後異世界に行った千尋は、そこで初めて生き残るために働くことを知る。働く中で、次第に彼女の表情に生気が蘇り、謙虚で、前向きな態度に変わっていく<sup>15)</sup>。映画では千尋が自立した人間に成長していく姿が描かれている。翻訳

版では、物語の最後に、千尋自身の、“I think I can handle it.”（うまくやっていると）というセリフが追加された。これは日本版にはない「主人公の成長」を強調させている。日本文化の表現のあいまい性とアメリカ文化の明示性という違いが背景にある<sup>16)</sup>。取屋淳子も、「“Spirited Away（「千と千尋の神隠し」海外版の題名）”が成長物語となったことで、アメリカで有名な『オズの魔法使い』や『不思議の国のアリス』と通じるものがあるとされ、（中略）細かい点では異なるところが多い作品であるが、物語の普遍性という共通点により、アメリカの観客は、“Spirited Away”という物語の世界がより理解し易くなったのである。」と分析している<sup>17)</sup>。

### c. 日本文化と欧米文化が形成された背景

日本社会では、これまで様々な外来文化を受容しつつ、独自の文化を形成してきた。柔軟な意識構造に支えられた日本社会は、多様な文化をバランスよく受け入れ、文化の多様性空間として機能してきた。

山折は、地震がなく安定している土地で暮らしてきた西欧諸国の人々は、客観的に自然を分析し様々なデータを恒常的にとってきた<sup>18)</sup>。他方、日本では自然の脅威と対峙してきた「無常観」をもつ。このような日本人の考え方が、日本の文化や歴史、日本の社会系勢力に大きな影響を与え続けていると述べる。天地万物に神が宿る多神教の考え方を、日本人が古来から持っていることを指摘している<sup>19)</sup>。

また、河合は日本人の考え方の根底にある多神教などの神話と文化の関係について、神話の構造が人間世界のあり方に反映していることを論じている<sup>20)</sup>。

日本文化には、「中空均衡構造」という全体の統合

よりも均衡を重視する特質を有する。中空であることは善悪、正邪の判断を相対化し、全体と調和的な存在が許容される。故にこの構造では「共存」や「共生」がキーワードとなる。

他方、欧米の文化は、一神教（キリスト教、イスラム教、ユダヤ教など）の文化であり、中心に至高至善の神が存在し、それによって全体を統合しようとする「中心統合構造」である。

この2つの構造には、一長一短あり、河合は現代日本の課題として、「われわれが課題とするのは、言うなれば、中心統合構造と中空均衡構造の両立ではないだろうか。（中略）グローバリゼーションの波の高い今日において、日本人が欧米諸国の人々と対等につきあってゆくためには、しっかりとした判断力、表現力、責任感を身に付けた『個人』として自分を確立してゆかねばならない。」と述べる<sup>21)</sup>。また、互いに相手の異なる世界観（一神教的世界観、多神教・アニミズム的世界観）を通して、自分のよって立つ価値観を、絶対視するのではなく、異なる体系があることを理解し尊重しつつ、他と対話を重ねることで、21世紀に生きる新たな道が発見されることを主張している。つまり、「中空均衡構造」と「中心統合構造」の両方が重要であり、それぞれが相互理解をするために、対話の必要性を述べている。これらの点を授業を通して児童に気づかせたい。

### ⑤本時の目標

日本文化と欧米文化の背景となっている宗教観を基に、「千と千尋の神隠し」がグローバル化に対応した理由について考えることができる。

### ⑥本時の展開

学習活動と内容	教師の働きかけ
1. 前時の学習内容の確認をする。 2. 学習課題を設定する。 3. 第2時の学習内容を確認し、全体で共有する。 ・「千と千尋の神隠し」に八百万の神が出てくる。 ・八百万の神の事を理解できるように翻訳によって、分かりやすく説明してある。 4. 「千と千尋の神隠し」のストーリーを想起し、資料から日本文化の特徴について読み取る。 5. 日本アニメを通して、日本文化のグローバル化について考えをまとめる。	1. 「千と千尋の神隠し」が欧米で受け入れられた理由について想起させる。 2. 「ドラえもん」や「千と千尋の神隠し」に対するアメリカの評価から、文化の違いがその背景にあることに気付かせる。 3. 日本が多神教文化であり、アメリカが一神教文化であることから、神に対する考え方の違いを想起させる。 4. 資料から、「千と千尋の神隠し」のように日本的な八百万の神が出てくる「中空均衡構造」の側面と、登場人物が成長する「中心統合構造」の側面があり、その両方が含まれている点（グローバル化に対応している点）に着目させる。 5. 日本文化の特徴をこれまでの学習をもとにまとめ、文化のグローバル化について考えさせる。

#### (4)「OUTPUT—現代文化型」授業の開発Ⅱ

##### ①単元名「誕生50周年—世界が認める新幹線—」

(第5年生)

##### ②指導目標

- 学習材の新幹線について関心を持ち、JRの取り組みや特色などを進んで調べ、その工夫や努力に関心をもつとともに、その背景にある日本文化について考えていこうとする意欲をもてるようにする。
- 新幹線の特徴について理解した上で、そのサービスや仕組みが世界に進出しつつあることを知り、その背後にある日本文化の何が世界に受け入れられているのか考えたり、表現したりできるようにする。
- 具体物や資料を通して、日本文化の何が受け入れられたのか意見交流をした上で、日本文化のグローバル化について児童一人一人が再認識して、自分なりに意見をもってとらえることができるようにする。
- 新幹線の歴史やその最先端技術を調べる活動を通して、新幹線の仕組みの工夫やサービスについて知り、それは世界で称賛されていることを理解できるようにする。

##### ③単元計画(全5時間)

第一次 世界最初の高速度鉄道(1)

- 世界が目にする新幹線の秘密

第二次 新幹線のこだわりとは?(2)

- 世界が驚く運行本数と時刻の正確さ
- 世界が目にするピンクレディ

第三次 最新技術で輝く日本文化(2)

- 新幹線のサービスとは?
- オモテナシは世界に伝わるのか

##### ④授業設計の視点

本単元では、新幹線を切り口に文化のグローバル化について考える。

具体的には、新幹線の安全対策、定時運行、清掃について教材化し、文化のグローバル化を考える手立てとした。

本単元で取り上げる新幹線は、東京オリンピック直前の昭和39年10月に開業した。最新の自動ブレーキ装置や、踏切を作らず全路線を高架するなど、新幹線に関しては徹底した安全対策を行った。その結果、開業から現在に至るまでの50年間、新幹線は乗車中の死亡事故を一度も出しておらず、新幹線の安全神話を生み出した。

また、新幹線は平均遅延が0.5分(2012年度)であり、運行時間の正確さも世界では例を見ない。徹底した安全対策、定刻運行は、日本人の文化そのものと言える。

新幹線の定時運行を支えているものの1つに、ピンクレディーと呼ばれる人たちがいる。彼女たちは、株

式会社「テッセイ」の従業員であり、JRから車内清掃を委託されている。

東京駅で折り返す列車は、到着後平均17分で出発する。乗客の乗り降りを考えた場合、実際の清掃時間はたったの10分程度である。彼女たちが清掃時刻を守るだけでなく、きちんと清掃し、乗客を迎えようとするおもてなしの心は、日本の良き文化と言えよう。

整然としたチームワークで清掃を行い、さらに乗客へのもてなしの態度も忘れないその仕事ぶりは、外国の人々にとっては驚くべきことであり、外国のテレビ取材を受けたり、外国から研修生が来たりするなど、世界から注目され、称賛されている。

本単元では、まず新幹線の歴史と仕組みについて知り、そこから新幹線が開業後一度も死亡事故を起こしていないことや、一日に何本も運行するにも関わらず、時間の遅れがほとんどないことを学習する。こうすることで、新幹線に携わる人々の工夫や努力について学んでいく。

ある程度の知識を獲得した上で、次に新幹線の清掃業務に携わる「テッセイ」について考えていく。限られた時間内で十分な清掃を行い、乗客を迎えようとするテッセイ従業員の「おもてなし」に対する取り組みについて考えを深めていく。

さらに、その取り組みを通して、日本文化の「おもてなし」とは一体なにか、追求していくことで、日本文化の根源についても考えていきたい。

本時では、新幹線の時刻に正確で安全な運行や清潔な空間を提供する背景には、日本人が長年培ってきた「おもてなし」の文化があることを学習した上で、文化のグローバル化について考えをまとめていく。

文化は、表面上伝播したように見えても、その根源は簡単に伝わるものでない。このことを授業後半で気付くことができるよう計画した。

##### ⑤本時の目標

これまでの学習を踏まえ、オモテナシ文化を切り口に日本人の徹底したモノづくりやサービスに対する取り組みについて学習したり、日本文化の根源について考えたりすることができる。

⑥本時の展開（第三次第2時）

学習活動と内容	教師の働きかけ
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. これまでの学習を振り返り，整理する。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 定時運行にこだわる理由や工夫や努力を想起。</li> <li>・ 新幹線の清掃会社テッセイについて想起し，その働きぶりに対する世界の驚きを整理。</li> </ul> </li> <li>2. 本時の学習課題を確認し，学習課題に対して予想した内容を互いに発表する。</li> <li>3. 出た意見を整理するため，学級で再吟味する。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外国に真似できない日本のよさ。</li> <li>・ おもてなしは日本人が大切に育んできた文化。</li> <li>・ おもてなしの本当の心は伝わりにくい。</li> </ul> </li> <li>4. 台湾新幹線が台湾の大震災をきっかけに日本の新幹線を導入することになったことを教えて，日本文化の根源について考える。</li> <li>5. 文化のグローバル化についてまとめる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. これまでの学習内容を想起しやすいようにこれまでのノートを見たり，学習内容に関する写真を提示したりする。</li> <li>2. 礼儀やきめ細かい心遣いという日本人特有の文化が新幹線のすごさの背景にあることを想起できるようにする。</li> <li>3. テッセイの清掃員や新幹線のダイヤの裏にあるおもてなしの心が外国には伝わりきってないことに気づくことができるようにする。</li> <li>4. おもてなしが日本文化の根源につながると気付いたり，考えたりすることができるよう，板書や言葉がけを工夫する。</li> <li>5. 学習内容を振り返るようにノート記述への言葉がけをする。</li> </ol>

5. おわりに

本研究では，グローバル社会に対応した国家・社会の構造を認識する授業を構成するに当たり，第2年次の今年度は文化のグローバル化に着目して既存文化への影響や社会問題化する構造を探り，グローバル社会学習の授業開発を行った。その成果として次の3点を挙げる。

第1に，文化のグローバル化によって生じる問題を，政治的・経済的影響としてでなく，文化の伝播と既存文化の関係から迫ることができた点である。文化はその特質から，物質的文化，制度的文化，精神的文化に分類でき，左記の順に伝播される性向をもつ。近年，文化のグローバル化は，急速かつ大量の物質的文化とそれに伴う制度的文化の伝播をもたらしている。そのため，これまでと異なり，既存社会で吟味・再創される前に既存社会に取り込まれ，既存社会の物質的文化だけでなく制度的文化の衰退も招いていることがわかった。

第2に，グローバル社会において既存文化を持続していくための手掛りを，文化のグローバル化の特徴や既存文化の特質から分析・検討できた点である。文化のグローバル化には，文化の画一化と特殊化という2つの特徴がある。これらは，既存文化における現代文化の普遍性や伝統文化の特殊性という性質と大きく関連している。つまり，既存文化に内在する普遍的・特殊の価値を世界に認められることが，既存文化を維持・発展させる方法として有効であり，自国民が自国文化の価値に気づき，それを魅力的な文化として世界に発信し文化交流していくことが重要だとわかった。

第3に，文化に焦点化したグローバル社会学習の授

業類型を示し，具体的な授業を開発・実践できた点である。文化のグローバル化の様相や既存文化の影響，社会問題化する構造をとらえ，児童にグローバルな見方・考え方を育むことができる授業を検討した。その結果，既存社会を軸として文化のグローバル化をとらえる上で，児童が学習材を通して具体的に学ぶには，文化の伝播の方向性や既存文化の種類を焦点化することで，「INPUT－伝統文化型」，「INPUT－現代文化型」，「OUTPUT－伝統文化型」，「OUTPUT－現代文化型」の4つの授業に類型化されることがわかった。

しかしながら，今回は「INPUT－伝統文化型」の授業開発を試みたものの，類型に適合した授業を開発できなかった。また授業構成では，文化の伝播や精神的文化に対する児童認識を意識するあまり，文化のグローバル化によって社会問題化する要因や既存文化のあり方に迫る授業になり得ていない場合もあった。これらの点は，今後の研究課題としていきたい。

引用（参考）文献

- 1) 新谷和幸，中丸敏至，松岡靖，沖西啓子，伊藤公一，木村博一，永田忠道「グローバル社会に対応した国家・社会の構造を認識する社会科授業開発」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第42号，2014，pp.57-66.
- 2) 西田芳弘「国際関係における文化の要素」『レファレンス』2月号，2005，pp.42-43.
- 3) 川崎賢一「記念講演 文化のグローバル化と日本の問題」『国際文化研究科論集』第21号，2013，pp.21-39. 文化の普遍性・特殊性と日本の現代文化・伝統文化との関連については，ここを参照。

- 4) ブランド国家論に関しては、西田芳弘、前掲論文、2005、p5。並びに、ピーター・ヴァン・ハム「ブランド国家の台頭」『論座』4月号、朝日新聞社、2002、pp.288-294。を参照。
- 5) ジョセフ・S・ナイ『ソフトパワー—21世紀国際政治学を制する見えざる手—』日本経済新聞出版社、2004、pp.65-120。
- 6) 文化の伝播に関する内容は、山上徹『食文化とおもてなし』学文社、2012、pp.3-5。を参照。
- 7) 寺沢正晴『日本人の精神構造—伝統と文化—』晃洋書房、2002、p.76。
- 8) 後藤健生『サッカーの世紀』文藝春秋、2000、pp.67-77。
- 9) F.Pマゲーン／忍足欣四郎訳『フットボールの社会史』岩波書店、1985、p.225。
- 10) ステファン・シマンスキー、アンドリュー・ジンバリスト／田村勝省訳『サッカーで燃える国野球で儲ける国—スポーツ文化の経済史』ダイヤモンド社、2006、pp.78-83。
- 11) 柳田國男『日本の祭』弘文堂書房、1942、pp.37-43。
- 12) 大藤時彦『柳田國男「日本の祭り」解説』角川ソフィア文庫、2013、p.250。
- 13) 山上徹、前掲書、2012、p.127。
- 14) 津堅信之『日本のアニメは何がすごいのか』祥伝社新書、2014、p.189。
- 15) 伊藤賀永「宮崎駿作品『千と千尋の神隠し』に関する—考察—子供の危機と“居場所探し”の物語として読み解く—」『関東学院大学人間環境研究所所報』(4)、2005、p.9。
- 16) 山田健太郎「英語版アニメ作品に見る翻訳の問題—『千と千尋の神隠し』の場合—」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第5号、2004、pp.195-205。
- 17) 取屋淳子「宮崎アニメのグローバル化：アメリカと台湾における受容の比較研究」桃山学院大学博士論文、2006、pp.136-145。
- 18) 山折哲雄「『混沌』と『無常』に見る日本人の人間観と自然科学の精神」社会技術研究開発センター、2011、pp.4-23。
- 19) 山折哲雄『日本人の宗教感覚』NHKライブラリー、1997、pp.145-149。
- 20) 河合隼雄『神話と日本人の心』岩波書店、2003。
- 21) 河合隼雄『中空構造の日本の深層』中央公論社、1982。